



学生評判記 / 第2回

小樽市花園「はつ花」

店主 / 岸 悠二さん・安さん

商大の小さな街の キャンパスは健在です



花園の小路の奥に位置する「はつ花」は昭和40年開店の小さな小料理屋である。斜里でそば屋を経営していた岸悠二さんと奥さんの安さんが、小樽が華やかかりし頃、その小樽でも一層のにぎやかさを誇っていた花園界隈に、カウンターと小上がりと、8畳と6畳の2階で、「はつ花」を開いた。葉や衣料の間屋が退けると会社員が毎日のように押し掛け、漁の時期には漁民が捕れた



マダラなど持参でやってきた。妙見川の畔の柳並木や見番が酔客を温かく迎え入れた時代であった。

商大生は「はつ花」開店の早い時期から足繁く通ったそうだ。とくに寮生やクラブ活動、あるいは下宿の学生が下宿単位で学生が誘い合って、なけなしの財布を叩いて夜遅くまで飲んだ。寮から2、3人の学生が来て、電話で呼び出しをかけてやがて大勢になる。下級生は断ることができない。酒は「北の誉」、でも学生には安いビールを勧めた。

商大生の思い出は尽きない。室内管弦楽団、演劇部、硬式テニス、ヨット部、ラグビー部、ボート部、それぞれのクラブはそれぞれの飲み方で豪快に飲んだ。柔道部と空手部の決闘騒ぎもあった。2階でゼミをやったこともあ

る。2階席は20人くらい入るのだが、学生なら50人は入れる。座れない者は立って飲む。北大との合同ゼミもやったそうだ。

それから37年が経ち、商大も花園界隈の風景も変わった。小路をひしめく飲み屋はビルに変わり、やがてビルも寂れた。商大の寮がなくなってからは学生の足も途絶え始めた。今は学生はほとんど来ない。たまに社会に出た学生が折を見て訪ねてくると、思い出話が着になる。ご主人は78歳の今でもなじみの学生の名前をよく覚えている。学生が来なくなってたんだ店もある花園界隈で「はつ花」は外見も中身も料理の味も健在である。先輩方の話や古い先生方の話はここで聞ける。商大の小さな街のキャンパスは頑張っている。